

佳作

たった一年の思い出

広島県 広島市立安西中学校二年 鈴見 咲菜

私の家は転勤族です。数年おきに父の転勤があります。小学校六年生の時は卒業と同時に鳥取県に引っ越し、鳥取県の中学校に入学しました。

入学式の日。クラス表が掲示されている靴箱前には新入生であふれかえっていましたが、全員顔も知らない他人です。心臓は位置が鮮明に分かるほど拍動していました。

入学式は無事に終わり、次の日からは授業が、一週間後からは部活が始まりました。私の近寄りがない雰囲気と内向的な性格で、クラスにも部活にもなじみずにいきました。そのような状態が続いた一、二か月間は学校に行くのが辛くて、ひっそり布団の中で涙を流す夜もありました。しかし、日に日に少しずつ他愛のない話ができるようになり、少しずつ友達もできて、毎日が楽しくなりました。休憩時間は

担任の先生と友達で談笑したり、体育祭、文化祭が近くなったらクラスのみんなで集まって練習をしました。楽しい時間は早く過ぎます。一年生も、いつの間にか終わりにさしかかっていました。

三月中頃。父の広島への転勤が決まったことが告げられました。私は自分の耳を疑いました。たった一年で転勤だなんて、今までなかったからです。しかし、転勤することは事実でした。「父が転勤する」ということは、「私は転校する」ということです。辛さを取り越えて、やっと鳥取で友達ができたのに、ふりだしにもどるようなことはしたくない。私は鳥取に残りたいと言いましたが、母に、父を支えなければいけないので無理だと断られました。引っ越しのことを認めたくなくて、先生方以外には誰一人、引っ越しことを言いませんでした。

広島へ引っ越しことをクラスメイトに告げたのは、なんと一年生の最後の授業です。担任の先生に呼ばれて、教卓の前に立ちました。声を出そうとしているのに、のど元で引っかかって出てきません。出そうとしている声は出ないのに、出すまいと思っていた涙はじわじわとこぼれてきました。教室中が静まり返りました。ふと担任の先生の方を見ると、先生

も泣いていました。私はかすれた声で、広島へ引越すことを告げました。すると担任の先生が、実はクラス全員、私が引越すことを知っていたと言っ
て、一年間の思い出の写真とクラスメイトからのメ
ッセージが書かれたアルバムをいただきました。先
生がクラスメイトと協力して、こっそりつくって
ださっていたのです。写真は笑顔で、メッセージは
「がんばれ！」や「また会おうね」などの温かい言
葉であふれていました。たったそれだけで、私は大
きく背中をおされました。今、ここ広島で頑張れて
いるのは、たった一年の思い出とクラスメイトから
のメッセージのおかげです。

私の将来の夢は、一年生の時の担任の先生のよう
な温かい教師になり、一年生の時のような温かいク
ラスをつくることです。